

[道 徳]

体験的な学習を取り入れた効果的な道徳授業

－役割演技を用いた小学2年生の実践から－

秋山 佳子*

1 主題設定の理由

平成30年度より「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」とする）が小学校において全面実施となった。学習指導要領の「小学校教育の基本と教育課程の役割」には、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して、適切な指導を行うこと。」¹⁾とあり、道徳科は教育の中核を担うものである。文部科学省による『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）』では、道徳の特別教科化により、道徳教育の実質化とその質的転換を実現することについて書かれている。そして、「道徳科においては、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める学習を通じて、内面的な資質や能力としての道徳性を主体的に養い、日々の生活や将来における道徳的行為や習慣に結び付けるという特別の教科としての特質を踏まえた質の高い多様な指導を行うことが求められている。」²⁾とある。「質の高い多様な指導方法」として、以下の3つが書かれている。

「質の高い多様な指導方法」

- 1 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習
- 2 問題解決的な学習
- 3 道徳的行為に関する体験的な学習

つまり、学級の児童の実態を踏まえて、授業の主題やねらいに応じて適切な指導方法を選択していくことが求められている。

今までの自分の道徳科の授業実践を振り返ってみると、資料を読み、表面的な心情理解に留まる授業が多かったり、内容項目について理解を深めていたか疑問に感じたりすることがあり、道徳科の授業に対する不安感や苦手意識があった。

また、東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部 第1プロジェクトによる「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査－道徳の時間への取組を中心として－」では、道徳の授業が十分に行われていないと感じている小学校教員が66.2%となっており、その理由として、「忙しくて他の指導に時間がとられがちである」が50.1%、「指導の仕方が難しい」が25.4%という結果であり³⁾、筆者と同じように、道徳科の指導の在り方について不安を抱えている教員も多い。

ここまで述べてきたように、道徳科の授業の充実が求められているが、道徳科の指導について不安を抱えている教師も多く、どのような指導法をとると、内面的な資質や能力としての道徳性を主体的に養い、日々の生活や将来における道徳的行為や習慣に結び付けることができるのか明確にする必要がある。本研究では、文部科学省から示された「質の高い多様な指導法」をより具体化した当校の取り組みを通して、その効果について検討していく。

*上越市立高田西小学校

2 研究の目的

本研究では、道徳的行為に関する体験的な学習及び自我関与を促すための役割演技を取り入れた学習を行うことで、効果的な道徳授業を構想・実践し、子どもの姿で検証し、体験的な学習及び自我関与を促すための役割演技を取り入れた道徳授業を提案することを目的とする。

3 実践の概要

平成30年10月に、当校の2年生30名に行った授業について紹介する。

(1) 主題名

あいてのことを考えて B(6) 親切, 思いやり

(2) 資料名

「まいごのすず」(学研)

(3) ねらい

下校時に、落とし物を拾った登場人物の気持ちを考え、自分のやりたいことを我慢して困っている人を助けたいという葛藤する気持ちに共感させる。さらに、親切にした後の役割演技を通して、相手のことを考え親切な行為をする大切さに気づき、親切にしようとする態度を育てる。

(4) 主題設定の理由

① ねらいとする価値

相手に親切にすることは、より良い人間関係を築く上で大切なことである。

2年生という発達段階では、友人関係も広がり、たくさんの人々と接することで、様々な人の考えに触れる機会も増えてくる時期である。一方、自己中心的な考えから、相手の立場を考えた行動をすることがまだ難しいという一面もある。身近に起こりうる具体的な場面でのどのように行動するか考えることを通して、相手に親切にすると相手が喜び、その喜びが自分の喜びにつながることを知り、親切にすることの大切さや温かい心で接することのよさに気付かせたい。

② 資料について

本資料は、教科書に掲載されているお話である。自分が見たい映画を見るために急いで下校している途中で、持ち主が分からない鍵を見付けどうすべきか悩む少年が登場する。児童にとって、自分がやりたいことがある状況の中で、相手が誰だか分からない人を助けるべきか悩む場面だろう。しかし、名前の分からない相手でも、困っていることは変わらず、自分にできることを考え相手を思いやる気持ちの大切さを考えることができる。

(5) 展開の方策

「落とし物を拾ったときにどうするか」という問いかけに、子どもは、「落とし主に届ける」という正論を悩むことなく言う場合がある。「何となく、そうした方がよい」という建前からの発言である。つまり、教材の登場人物との接点がなく、他人事としての判断をしてしまうのである。学習の中に役割演技を入れることで、本当に喜んでいる落とし主の発言や表情、またそれを見ることで「届けて良かった」という実感を共有しやすくなる。他人事としての落とし物の事例ではなく、自分事としての出来事に近づくのである。

効果的な役割演技のためには、場面の選定が重要である。また、日頃から鍵を用いて一人で家に帰ることの多い子や実際に落とし物を届けた経験のある子を意図的に指名するなどの配慮を行う。

(6) 展開の構想

時間	○ 学習活動 ・ 予想される児童の反応	● 教師の指導・支援 UD化の視点 ◎ 評価 (評価方法)
5分	○ 親切にした経験やその時の気持ちを話し合う。 発問1 親切にしたことはありますか。その時、どんな気持ちでしたか。 ・ お隣さんの消しゴムを拾ってあげました。「ありがとう」って言われて嬉しかったです。 ・ 1年生に学校のことを教えてあげました。1年生が喜んでいて嬉しかったです。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;">親切にすると、どんな気持ちになるのだろう。</div>	● 自分の体験を思い出せるように、写真を提示する。
35分	○ 資料の前半の話 (鍵を拾った場面まで) を聞き、手のひらの鍵を見つめているゆうきさんがどのようなことを考えていたか、考える。 発問2 ゆうきさんは、鍵を見つめてどんなことを考えていたのでしょうか。 ・ 鍵を落とした人は困っているだろうと考えていたと思います。 ・ 映画も見たいし、どうしたらいいだろうと考えていたと思います。 ○ 資料の後半の話 (鍵を届けに戻る場面) を聞き、鍵を持って学校へ戻った二人の行動について考える。 発問3 どうして二人は、学校へ戻ったのでしょうか。 ・ 鍵を落とした人が困っているから助けたいと思ったと思います。 ・ このまま映画を見に行っても楽しめないと思ったと思います。 ○ 鍵を届けた翌日、鍵の持ち主に会った場面の役割演技を行う。 発問4 鍵を届けた次の日、持ち主に会ったゆうきさんとまさやさんを自由に演じてみましょう。 ・ 鍵を拾ってくれてありがとう。助かったよ。(鍵の持ち主) ・ 鍵が届いてよかったよ。(ゆうき、まさや) ○ 役割演技について話し合う。 ・ 鍵の持ち主は、鍵が見つかってとっても嬉しそうでした。 ・ ゆうきさんとまさやさんも「ありがとう」って言われた時、嬉しそうな顔をしていました。	● 主人公の心の動きが分かるように、場面絵を用いながら資料を提示する。 視覚化 ● 鍵を見つめていたゆうきさんには、自分優先の気持ちと、相手を思いやる二つの気持ちがあることが分かるように板書する。 視覚化 ● ゆうきとまさや、鍵の持ち主を演じる児童を指名する。 ● 役割演技を行う場面の状況を共通理解するために、場所や出来事を押さえ、その後は自由に演じてよいことを伝える。 ● 演じられた後の話し合いでは、演じられた様子について、観客、演者の順に演者がどのようなことを考えていたと思うか、発表させ、親切にしたりされたりした時の気持ちに気付かせる。
5分	○ 親切にするとどんな気持ちになるか考える。 発問5 今日の学習を通して、親切にするとどんな気持ちになると思いましたか。 ・ 親切にすると温かい気持ちになると思いました。 ・ 知らない人にでも「ありがとう」って言われて嬉しい気持ちになるから自分も親切にしたいと思いました。	◎ 親切にすると、された方だけでなく、した方もよい気持ちになることに気付くことができる。(学習シート)

(7) 実際の授業の様子

① 二人が学校へ戻った場面について考える場面

発問3「どうしてこの二人は学校へ戻ったのでしょうか。」の発問に対して、児童は以下のような発言をした。

A児：映画より人の方が大事だから

B児：映画はいつか行けるけれど、鍵は誰のか分からないと届けられない。

C児：映画はいつでも行ける。鍵の持ち主が困っている。

D児：映画を見ていると自分は楽しいけれど、困っている人は困ったまま。

E児：鍵も持ち主のところへ戻れず、かわいそう。

〈考察〉

自分の楽しみよりも、困っている相手を心配し、助けたいと思っている児童がほとんどであった。

② 鍵を届けた翌日、持ち主と対面する場面の役割演技

教科書では、鍵を届けたことは書かれているが、その後の場面は書かれていない。鍵が無事に持ち主に届き、次の日、届けた二人と鍵の持ち主が出会う場面で役割演技を行った。鍵の持ち主を、実生活から鍵の大切さ分かるA児、届けた二人を発問3で鍵の持ち主のことを心配した発言をしたB児とC児とした。役割演技の様子は以下のものであった。

T：この二人が鍵を届けてくれたんだよ。

A児：鍵を拾ってくれてありがとう。

C児：どういたしまして。

B児：お家に入れた？

A児：うん。

B児：よかったね。



写真1 役割演技をしている様子

この後、役割演技を見ていた観客側の児童と実際に演じた児童に問い、相手に親切にするとどのような気持ちになるかを確認した。その様子を以下に示す。

T：鍵を届けてもらったAさんは何と言いましたか。

F児：「ありがとう」と言っていました。

T：鍵を届けた二人は何と言っていましたか。

G児：「どういたしまして」と言っていました。

H児：「家に入れてよかったね」も言っていました。

T：鍵を届けてもらったAさんはどんな顔をしていましたか。

I児：嬉しそうな顔でした。

T：鍵を届けた二人はどんな表情でしたか。

J児：みんなにこにこして、嬉しそうな顔でした。

T：やった人たちに聞きます。鍵を届けてくれた人たちとお話してみてどんな気持ちになりましたか。

A児：「拾ってくれてありがとう」って思った。

B児・C児：「ありがとう」って言ってもらえて嬉しかった。

〈考察〉

演じた児童だけでなく、観客側にも問うことで、親切にした時の気持ちを全体で共有することができた。

③ 本時の学習を通しての振り返りを書く場面

「今日の学習から、親切にするとどんな気持ちになると思いましたか。」と問い振り返りを記述させた。

【役割演技を行った3名の児童の振り返り】

A児	B児	C児
嬉しくなる。いい気持ちで明日からずっと元気に学校に行ける。	もし、友達や学校の人のものだったら、お買い物よりその落とし物を届けてあげようという気持ちになりました。その持ち主に「ありがとう」って言われたら、映画よりも嬉しい気分になって、これからもきちんと落とし物は学校に持っていったり自分でどうにかしようと思いました。	また困っている人がいたら助けてあげる。大事なものがなくなってしまう人がいたら探したり、見つけたりしたら、その日に楽しいことがあっても人に渡してあげる。そうしたらもらった人は、嬉しそうにありがとうって言ってくれて拾ってよかったなって気持ちになる。

【他の児童の振り返り】

- ・親切にすると、親切にしてもらった人やした人が嬉しくなる。
- ・親切にしたら、こんなに嬉しい気持ちになるんだったら、またいっぱいして笑顔にさせたりしていい気持ちにさせたい。
- ・見つかった方も嬉しいし、お礼をしてもらっても嬉しいからやってよかったと思う。
- ・みんなが笑顔になって、友達ができる。自分も嬉しい気持ちになる。

〈考察〉

役割演技を行った児童も観客側の児童も親切にすることで得られる喜びへの気付きや、自分も親切な態度で接したいという意欲が高まった記述が見られ道徳的な価値についての理解に深まりが見られた。

4 考察

授業中の発問3では、「相手が困っているから助けなくてはいけない。」と相手の気持ちを想像し、親切な行動をしたという思いをもつことはできたが、親切にすることの意義や自分の喜びにつながるということを考えた児童は少なかった。

しかし、終末で記述した「親切」に対する考えを見ると、親切にすることで自分も嬉しいと感じるという記述をした児童が増えた。役割演技で演者になった児童だけでなく、観客側だった児童も親切にされた相手の喜びが自分の喜びにつながることに気付くことができた。鍵を届けた翌日、持ち主と対面する場面の役割演技を行ったことで、親切にすると、した側だけでなくされた側も大きな喜びを感じることを目の前で見たことで、親切にする良さを実感することができたと考える。学習指導要領特別の教科道徳解説では、「親切、思いやり」の「第1学年及び第2学年における指導の要点」で「相手に親切にした結果として相手の喜びを自分の喜びとして受け入れられるようにし、具体的に親切な行為ができるようにすることが大切である。」⁴⁾と記されており、本実践の児童の様子は、相手の喜びを自分の喜びとして受け入れ、親切にしていこうという意欲をもたせることができたと考える。役割演技を行うことで、困っている相手に優しく接することで自分にも喜びが訪れることを理解させることができた。

5 成果と課題

本実践では、教材では描かれていない場面で体験的な学習及び自我関与を促すための役割演技を行った。教材を読み、話し合うだけでも「落としした人は鍵が届いて、さぞ嬉しかっただろう」や「映画を諦めて鍵を学校へ届けた二人もこれでよかった」などとは思っている。しかし、それは資料から想像した考えであり、児童にとっても自信がもちにくいものである。児童は実際にその場面の気持ちを発言や行動に表した役割演技を見ることで、演者の喜びの表情や感謝の言葉から、相手に親切にしたり、されたりした当事者の気持ちをより実感的に受け止め、自分の考えに確信を持つことができる。また、新しい見方に気づくこともある。役割演技を通して、親切にする意義についての理解を深めることができたと考える。

実践を通し、3つの課題があると考える。

1つ目は、役割演技を行う上での場面の設定と教師の問いかけである。教材にない部分を即興で行うということで、状況を詳しく確認することが必要であった。本実践では、「鍵の持ち主はどれくらい困っているのでしょうか。」などという問いで、相手の様子を想像することができた。

2つ目は、児童の思考を揺さぶる教師の問い返しである。役割演技を用いた学習をより効果的にするために、葛藤や迷いを感じさせることで、親切にした喜びを更に大きく実感することができたと考えられる。体験的な学習は有効であるが、事前の展開によって効果が大きく変わってくるので、何を考えさせたいのかを教師が明確にもって授業を行うことが重要である。

3つ目は、役割演技後の話し合いで教師の感想の引き出し方や感想の認め方によって、大きな差が生じることである。単に、体験的な活動をするだけでは効果は少なく、演じた場面について話し合うことで道徳的な価値についての理解が深まる。教師自身が、どのようなことを話し合わせたいのか、どのように切り返すかが重要である。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』, 17p
- 2) 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議,『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）』, 5p
- 3) 東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部 第1プロジェクト,『「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査 -道徳の時間への取組を中心として-」』, 22~23pp
- 4) 文部科学省,『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』, 41p